研究ノート

終末期看護論におけるインパクトシートの活用によるルーブリック評価の学習効果
－主体的に学習に取り組むためのルーブリック評価の活用－

Learning Effect of Rubric Evaluation by Utilizing Impact Sheet in End-of-Life Nursing Theory:
Utilization of the Rubric Evaluation to Independently, and to Work on Learning

佐藤真由美
Mayumi SATO
旭川大学保健福祉学部保健看護学科

キーワード：終末期看護，看護学生，インパクトシート，プロジェクト学習，ルーブリック評価

抄　　録

日本看護系大学協議会で示されている看護学士課程におけるコアコンピテンシーに基づく卒業時到達目標では，人の死と死にゆく人とその人を愛する人の全人的苦悩を軽減・緩和し，死にゆく人の意思を支え，その人らしくあることを援助する方法の習得が求められている[3]。しかし臨地実習では終末期の看護を経験する学生は多くない状況である。そのため，教育的工夫が必要とされ，講義では研究報告を参考に映像やプロジェクト学習を取り入れた。また学生が積極的に講義に参加し，主体的な学習に取り組むことにより学生自らが課題を見つけ，解決するという要素も必要である。そこで，プロジェクト学習を取り入れ，ポートフォリオ評価を基盤としたルーブリック評価や講義にインパクトシートを使用したルーブリック評価を取り入れ講義の工夫を行った。

結果，ルーブリック評価を取り入れた学習効果では，「とてもつながった」学生が有意にインパクトシートの目標達成が「出来ていた」。さらに「終末期看護論のどのような学びが，臨地実習で生かせそうか」の記述回答を共起ネットワークの作成をすることにより，終末期看護の学びが３群に分けられた。３群は，「Ⅰ．終末期患者とその家族を考えた看護」，「Ⅱ．グループワークでの学び」「Ⅲ．それぞれの価値観の考え方」のカテゴリーが見出された。このような講義の工夫により学生が積極的に講義に参加し，主体的に学習に取り組み，学生自らが課題を見つけ，解決するという要素が示唆された。

Ⅰ　研究の意義および目的

わが国では急速な高齢化とその後に続く多死社会を迎える。それに伴い厚生労働省は，最後まで尊厳を尊重した人間の生きかたに注目した医療を目指すことが重要であるという考えに基づいて2015年３月より「終末期医療」という言葉の使用から「人生の最終段階における医療」という言葉への切り替えを行っている[1]。これにより，今まで以上に尊厳を尊重した人間の生き方が注目され，看護師には「その人らしい」とも言い換えることができる生き方を支援する役割が期待されている[2]。また，日本看護系大学協議会で示されている看護学士課程におけるコアコンピテンシーに基づく卒業時到達目標では「エンド・オブ・ライフにある人と家族を援助する能力」としており，人の死と死にゆく人とその人を愛する人の全人的苦悩を軽減・緩和し，死にゆく人の意思を支え，その人らしくあることを援助する方法の習得が求められている[3]。しかし，臨地実習で終末期の看護を経験する学生は多くない状況である。そのため，教育的工夫が必要とされる。看護基礎教育検討会報告書でも臨地実習前後の講義や演習における教育内容，方法の工夫を図る余地があると

考えられ，臨地実習に加えてこれらの工夫が一層推進されるよう留意されている[4]。

終末期看護に関する教授法における学びでは，終末期ケアに関するVTR視聴での影響により，大学生に多面的な理解が得られたという報告[5]や，探求学習を取り入れた学習をすることで，知識の獲得だけではなく，知識を活用する力や，倫理観の獲得，学習意欲の喚起や主体性の促進といった効果につながった[6]との報告がある。また，終末期看護ケアシミュレーションの参加により，レジリエンスを高められたという報告[7]や模擬患者シミュレーションにより現実的な体験をすることで，知識を得ることができ，自己成長につながった[8]という報告もある。更に，講義とシャドウウイングの併用により，がんと共に生きる人と家族に対する看護実践における基本的な姿勢の学び[9]や終末期看護においての学習意欲を高める要因として，映画の視聴などの効果が明らかにされている[10]。

A大学における終末期看護教育では，基礎看護学実習しか終えていない看護系大学３年生に，成人看護領域の科目として終末期看護論の講義が行われている。臨地実習においては終末期の看護を経験する学生は多くない状況にあることで教育的工夫が必要である[4]といわれ，日本看護系大学協議会で示されている看護学士過程におけるコアコンピテンシーに基づく卒業時到達目標を踏まえ，臨地実習において終末期患者を受け持った時に生かされるような工夫が求められる。さらに講義では，学生が積極的に講義に参加し，主体的に学習を取り組むことにより学生自らが課題を見つけ，解決するという要素も必要である。そのため，研究報告を参考に映像やプロジェクト学習を取り入れ，ポートフォリオ評価を基盤としたルーブリック評価やインパクトシートを使用したルーブリック評価を取り入れ講義の工夫をした。本来インパクトシートは看護実習の日々において成長するために，毎日しっかりと自分の目標を掲げ，患者のビジョンを叶えるために書き入れるものであり，その日インパクトのあったことや学んだことをその場でメモし，後から俯瞰することで自らの気づきや自体からの課題を発見・解決に有効とされ，ポートフォリオの一部として使用されている記録物の一つである[11]。また，厚生労働省では，自己学習力の向上という観点からポートフォリオ評価を基盤としたルーブリック評価を行う必要があるとしている[12]。そのため，今回の講義ではインパクトシートとポートフォリオ評価を基盤としたルーブリック評価の組み合わせにより，自ら講義の課題を発見し，解決することで講義の学びを深められたか，また，グループで行うプロジェクト学習にポートフォリオ評価を基盤としたルーブリック評価をすることにより，主体的に学習に望み，学習効果につながったかを調査し，今後の終末期看護論の講義や，臨地実習での一助なることを目的とした。

Ⅱ　教　授　内　容

１．インパクトシートの記録方法

終末期看護論の講義が始まる前に，講義予定表に書いてある講義内容に基づいて個々の学生に「今日の目標」を立ててもらった。そして講義後，自身の立てた目標に対して学ぶことができた内容を書き入れ，目標を評価してもらった。また，講義の中でインパクトのあった内容を書き入れてもらった。そして次の講義の時に提出してもらった。

インパクトシートの評価は10講義分をルーブリック評価し，講義評価の一部とした。

２．視聴覚教材

初めてのがん看護－がんサバイバーへの支援－丸善出版株式会社による学習

３．プロジェクト学習

11グループでグループワークを実施した。人生の最終段階において，患者にどのような最期を送ってもらいたいかという視点で「人間の尊厳をめぐる死の考察をする」という内容に基づいたテーマを５つ掲げた。テーマは，「１．死について考えることの意味」，「２，生命倫理としての死の考察」，「３．生命の質QOLとは何か」，「４．人間の尊厳とは何か」，「５．望ましい死 Good Death とは何か」，の５つである。テーマはグループで話し合い，選択し，ポートフォリオの各フェーズに沿って実施してもらった。また，ポートフォリオはグループで１冊作成してもらい講義終了後に提出してもらった。ポートフォリオの各フェーズには，1．計画書（テーマ選択理由，目的，役割），2．ワークシート（グループで検討した内容や課題，グループワーク時のリフレクション，文献やインターネットの提示）3．プレゼンテーション資料（発表内容，他のグループの他者評価）4．個人の成果物（レポート）を活用した。そしてポートフォリオ評価に基づきルーブリック評価を作成し実施した。ルーブリック評価はグループワーク中に意識させながら実施させた。また，ルー

ブリック評価は５項目で作成したが，３項目はグループで評価し，２項目の１つは個人レポートを評価し，もう１項目はグループワークの発表を他のグループ全員に他者評価してもらったものを平均し評価点とした。

Ⅲ　研　究　方　法

１．研究対象者

北海道にある看護系大学生，63 名を対象者に質問紙票調査を実施する。

２．研究実施期間

2020 年４月～８月

３．調査方法

質問紙票調査は，約 10 ～ 15 分程度で回答できるものとし，研究者が説明を終えた後に回答してもらい，質問紙票調査用紙は回収箱に投函してもらった。また，研究者は質問紙票を配布し，説明後その場を離れた。回答は無記名であり，回答内容は学生の評価の対象とは無関係であることを説明した。調査への同意は，質問紙への回答をもって得るものとした。

４．調査内容

インパクトシートとグループワークでのポートフォリオを活用したルーブリック評価により学習効果があったかを検証するために，ルーブリック評価の質問紙票調査を実施した。質問紙票は，ルーブリック評価される内容（配点項目）が明記されていることで，「学習到達状況が明確となり学習効果になったか」，「インパクトシートの今日の目標や学び，インパクトを書くことでどのような学習効果があったか」，「グループワークではテーマを決め，テーマに取り組むことで課題を解決することにより学習効果につながったか」，など４件法で質問した。また，「終末期看護論のどのような学びが，臨地実習で生かせそうか」を自由記述してもらった。

5. 分析方法

ルーブリック評価におけるインパクトシートやグループワークの効果の比較，グループワークにおける学習効果および影響を χ^2 検定によりその効果があったかの関連を分析し確認した。統計解析には「spss ver.18.0」を用い，有意水準は５％未満とした。また，インパクトシート使用による学習効果の関連要因を調べるため，「１．講義に集中できた，２．記録することでさらに印象に残った，３．知識として定着した，４．自分の考えを加えて書くことができた」という質問に複数回答してもらい集計した。

終末期看護論でどのような学びが臨地実習で生かせそうかの記述回答では，テキストマイニングの手法（計量テキスト分析ソフト KH Coder ver3.0 使用）で分析した。電子テキスト化された記述の形態素解析を行い頻出語 220 語の中から頻出回数が多かった語句（5 回以上）のリストを用いて「共起ネットワーク」で検討した。共起ネットワークは抽出語を用いて出現パターンの似通った語を線で結んだ図であり，学んだ内容の概要を直感的･融合的に把握するために活用した。

出現回数の多い語句ほど大きく，共起の程度が強いほど太い線で描画される。

6. 倫理的配慮

研究への参加は任意であり，回答の有無や内容により不利益を被ることはないこと，途中の中断も可能であることを調査対象者に十分に説明した。個人情報保護については，自記式質問紙調査では，回答はすべて無記名の連結不可能匿名化とし，回収時には，研究者がその場を離れることにより個人の回答が特定されないよう配慮した。結果は研究の目的以外には使用せず，学会などで研究成果を公表する際には学校や個人が特定でないように匿名化した。なお，本研究は旭川大学倫理審査委員会の承認（承認番号 2020/９/15）を得て実施した。

Ⅳ　結　　果

回答が得られた 57 名（回収率 90.4％）のデータを分析対象とした。性別は女性 52 名（91.2％），男性５名（8.8％）である。

１．視聴覚教材の効果および頻度

「視聴覚教材の使用が学習につながったか」では，「つながった」40 名（70.2％），「まあまあつながった」15 名（26.3％），「あまりつながらなかった」2 名（3.5％）であった。頻度では「ちょうど良かった」38 名（60.7％），「まあまあ良かった」18 名（31.6％），「足りなかった」１名（1.8％）である。

表１　ルーブリック評価における学習効果および影響　　N＝ 57

	全体	ルーブリックの学習効果			p 値
		とても学習効果につながった（n＝20）	学習効果につながった（n＝30）	あまり学習効果につながらなかった（n＝7）	
	n（%）	n（%）	n（%）	n（%）	
終末期のイメージ					
変わった	21(36.8)	11(55.0)＊＊	6(20.0)＊＊	4(57.1)	.003
まあまあ変わった	25(43.8)	4(20.0)	20(66.7)＊＊	1(14.3)	
あまり変わらなかった	9(15.7)	4(20.0)	4(13.3)＊＊	1(14.3)	
変わらなかった	2(3.5)	1(5.0)	0(0.0)	1(14.3)	
インパクトシートの目標立案					
出来た	46(80.7)	18(90.0)	25(83.3)	3(42.9)＊＊	.003
まあまあ出来た	11(19.3)	2(10.0)	5(16.7)＊	4(57.1)＊＊	
インパクトシートの目標達成					
できた	27(47.4)	16(80.0)＊＊	10(33.3)	1(14.3)	.001
まあまあ出来た	28(49.1)	4(20.0)	18(60.0)	6(85.7)	
出来なかった	2(3.5)	0(0.0)	2(6.7)	0(0.0)＊＊	
グループワークでの話し合い					
出来た	37(64.9)	13(22.8)	19(33.3)	5(8.8)	.992
まあまあ出来た	20(35.1)	7(12.3)	11(19.3)	2(3.8)	
グループワークの学習効果					
効果あり	29(50.9)	14(24.6)	13(22.8)	2(3.5)	.082
まあまあ効果あり	28(49.1)	6(2.5)	17(29.8)	5(8.8)	
グループワークでテーマを話し合う時に目的・目標は役立てることができたか					
出来た	36(63.2)	16(28.1)	16(28.1)	4(7.0)	.001
まあまあ出来た	19(33.3)	4(7.0)	14(24.6)	1(1.8)	
あまりできなかった	2(3.5)	0(0.0)	0(0.0)	2(3.5)＊＊	

χ^2 検定，Haberman 法による残渣分析（＊＊p＜ .01 ＊p＜ .05）

２．ルーブリック評価におけるインパクトシートやプロジェクト学習の効果の比較（表１）

「ルーブリック評価の学習到達状況が明確になり，学習効果につながったか」の質問では，「とても学習効果につながった」20 名(35.1%)，「学習効果につながった」30 名(52.6%)，「あまり学習効果につながらなかった」7 名（12.3%）であった。ルーブリック評価による学習効果は全体で「とても学習効果につながった」「学習効果につながった」で見ると 50 名（87.7%）と高い傾向であった。また，ルーブリック評価の学習評価に関連あるものを比較した。

「終末期看護のイメージの変化」では，「変わった」21 名（36.8%），「まあまあ変わった」25 名（43.8%），「あまり変わらなかった」9 名（15.7%），「変わらなかった」2 名（3.5%）である。ルーブリック評価の学習効果に「とてもつながった」，「つながった」学生は「終末期看護のイメージの変化」では，「変わった」21 名（36.8%），「まあまあ変わった」25 名が有意に高い傾向であった。

「インパクトシートの目標立案ができたか」では，目標立案「出来た」46 名（80.7%），「まあまあ出来た」11 名（19.3%）であった。ルーブリック評価の学習効果との比較では，学習効果に「つながらなかった」学生はインパクトシートの目標立案が学習効果に「とてもつながった」，「つながった」，学生より有意に低い傾向であった。

「インパクトシートの目標達成」では，目標達成「出来た」27 名（47.7%），「まあまあ出来た」28 名（49.1%），「出来なかった」2 名（3.5%）であり，ルーブリック評価の学習効果に「とてもつながった」学生が有意にインパクトシートの目標達成が出来ていた。

「プロジェクト学習時のグループワークの話し合い」に関しては，話し合いが「出来た」37 名（64.9%），「まあまあ出来た」20 名（35.1%）であり，話し合いの「出来ていない」グループはなかった。

「グループワークの学習効果」に関しては「効果あり」29 名（50.9%），「まあまあ効果あり」28 名（49.1%）であり，グループワークの学習効果が「なかった」学生はいなかった。

「グループで決めたテーマを話し合う目的・目標を

役立てることができたか」では，役立てることが「出来た」36 名(63.2%)，「まあまあ出来た」19 名(33.3%)，「出来なかった」2 名（3.5%）であり，ルーブリック評価の学習効果と「つながらなかった」学生は有意にグループで決めたテーマを話し合う目的・目標を役立てることが出来ていなかった。

3．インパクトシート記述による学習効果

インパクトシートのインパクトを書くことでどのような学習効果があったかを項目別に複数回答してもらった。結果は，「講義に集中できた」38 名（67%），「記録することでさらに印象に残った」38 名（67%），「知識として定着した」10 名（18%），「自分の考えを加えて書くことができた」17 名（30%）であった。「講義に集中できた」38 名（67%），「記録することでさらに印象に残った」38 名（67%）の 2 項目は 60%以上の学生が選択していた。（表 2）

4．グループワークにおける学習効果および影響

グループワークによるプロジェクト学習では，その学習効果と「グループワークのテーマを話し合うための目的・目標に役立てることができたか」の関連を調べると，「グループワークにおける学習効果」が「あった」と答えた学生の方が「まあまああった」と答えた学生より有意にグループワークのテーマを話し合うための目的・目標に役立てることが出来ていた。（表 3）

表 2　インパクトシートの学習効果内容　　N＝ 57（%）

講義に集中できた	38(67)
記録することでさらに印象に残った	38(67)
知識として定着した	10(18)
自分の考えを加えて書くことができた	17(30)

複数回答人（%）

表 3　グループワークにおける学習効果および影響　　N＝ 57

	全体	グループワークにおける学習効果		p 値
		効果あり（n＝29）	まあまあ効果あり（n＝28）	
	n（%）	n（%）	n（%）	
グループワークでテーマを話し合う時に目的・目標は役立てることができたか				
出来た	36(63.2)	27(93.1)＊＊	9(32.1)＊＊	.001
まあまあ出来た	19(33.3)	2(6.9)＊＊	17(60.7)＊＊	
あまりできなかった	2(3.5)	0(0.0)	2(7.1)	
グループワークでの話し合い				
出来た	37(64.9)	25(86.2)＊＊	19(33.3)＊＊	.001
まあまあ出来た	20(35.1)	4(13.8)＊＊	16(17.1)＊＊	

χ^2 検定，Haberman 法による残渣分析（＊＊p＜ .01 ＊p＜ .05）

5．「終末期看護論でどのような学びが，臨地実習で生かせそうか」の記述回答における共起ネットワークの作成

共起ネットワークの構造は，「患者」「価値観」「グループ」が中心軸となり，「自分」が他との結節点となっていた。語句の結びつきから，主な終末期の看護の学びが 3 群に分けられ，「Ⅰ．終末期患者とその家族を考えた看護」，「Ⅱ．グループワークでの学び」「Ⅲ．それぞれの価値観の考え方」のカテゴリーが見出された（図 1）。

具体的な回答としては「終末期にある患者家族にも焦点を当てて家族にも看護ケアをしていかなければならないことを学んだ」，「他のグループの考えを聞くことで視野が広がるきっかけとなった」，「人それぞれの考え方，価値観，大切にしている物が異なるので，その人らしく死を迎えられるように患者を尊重しながらケアをすることが大切だと学んだ」などがあった。

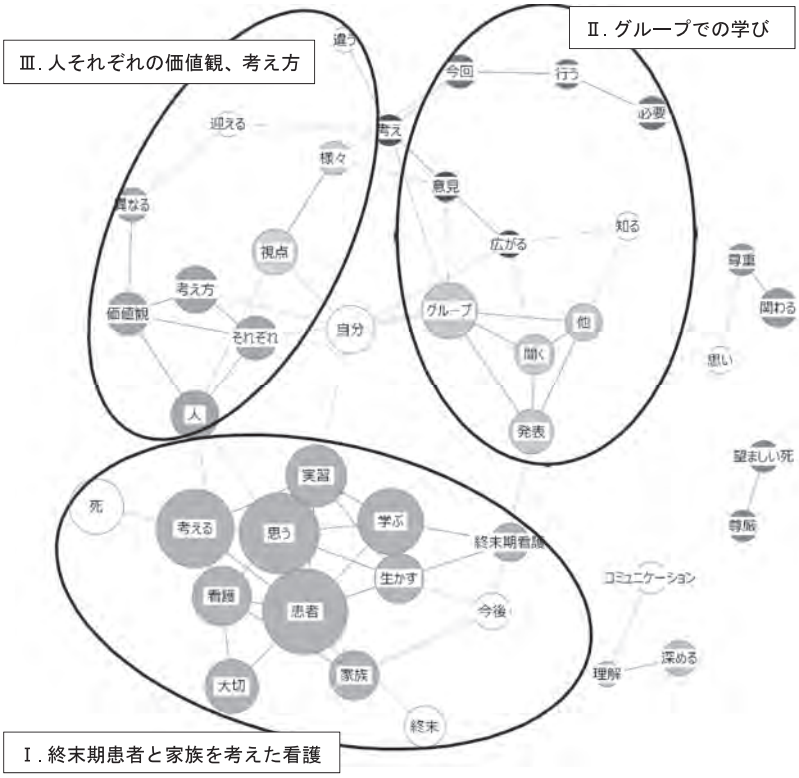

図１　終末期看護論での学び

Ⅴ　考　　察

１．視聴覚教材の使用が学習につながったかどうかでは，「つながった」40 名（70.2%），「まあまあつながった」15 名（26.3%）の 2 項目で 80%以上が学習効果に影響している。これより視聴覚教材に関しては，学習効果に大きく関わっていると考える。

また，視聴覚教材の視聴後に学生自身の死生観をレポートしてもらった。死や生について改めて考えることでそれぞれのテーマを深く考える基になったのではないかと考えた。

視聴覚教材に関しては，先行研究で言われているように終末期看護においての学習意欲を高める要因として[10] 学習効果を高められただけではなく，講義に沿った内容を取り入れたことにより思考の幅が広がり，更にプロジェクト学習に生かされ，課題の発見や解決に至ったように思われる。

２．インパクトシートの利用とそれに伴うルーブリック評価では，学習態度及び効果では 70%近い学生が，「講義に集中できた」，「インパクトシートに記録することでさらに印象に残っている」と回答している。インパクトシートは講義前に本日の目標を掲げることで，講義される内容を事前にイメージし，講義を聞いたときにイメージとのギャップがインパクトになり，さらに内省し印象に残ったのではないかと考える。そして内省することで講義を聴いたときに疑問に思ったことが課題となる。更に，課題を解決しなければ目標達成できないため学習を追加したことで，印象に残ったのではないかと考える。また，目標の評価を講義後にしなければならないため，講義に集中できた学生が多かったのではないかと考えられる。また，ルーブリック評価における学習効果と関連させた内容ではインパクトシートの目標立案や目標達成が出来ていない学生が有意にルーブリックの学習効果にもつながらなかった。しかし全体数で考えると 80%以上の学生がインパクトシートの目標立案や目標達成，ルーブリック評価の学習効果につながっており，インパクトシートを講義に取り入れたことで学生が積極的に講義に参加し，主体的に学習に取り組むことが出来，学生自らが課題を見つけ，解決するという要素は達成出来たと考える。

３．プロジェクト学習を取り入れたポートフォリオ評価を基盤としたルーブリック評価に関しては，人生の最終段階において，患者にどのような最期を送っても

らいたいかという視点で，「人間の尊厳をめぐる死の考察をする」という内容に基づいたテーマを５つ掲げグループで選択してもらった。グループでテーマを選択した理由や，そのテーマの課題を解決するための目的や目標を掲げる経緯では，講義や視聴覚教材が反映されていた。特に視聴覚教材の影響が高かった。ポートフォリオにはプロジェクト学習のための１．計画書（テーマ選択理由，目的，役割），２．ワークシート（グループで検討した内容や課題，グループワーク時のリフレクション，文献やインターネットの提示），３．プレゼンテーション資料（発表内容，他のグループの他者評価）４．個人の成果物（レポート）を活用したルーブリック評価までファイル入れた。各グループ４～６人で実施したが，ポートフォリオ評価を基盤としたルーブリック評価のため，各グループで評価される内容を確認しながら進められていた。グループワークでの話し合いも円滑にされ，話し合いに参加できなかった学生やグループワークの学習効果がなかったと答えた学生はいなかった。しかしグループワークのテーマを話し合う目的・目標に関して役立てることが「あまり出来なかった」学生が２名（３.５％）いたことから，自分の考えたいテーマにならなかった可能性や理解できない学生がいたと考える。また，「まあまあ出来た」と答えた学生も「出来た」とはっきり言い切れない部分では，役立てることが出来なかった学生と同じことが言えるのではないかと考える。

４．「終末期看護論のどのような学びが，臨地実習で生かせそうか」の記述回答における共起ネットワークの作成により主な終末期看護の学びが３群に分けられ，「Ⅰ．終末期患者とその家族を考えた看護」，「Ⅱ．グループワークでの学び」「Ⅲ．それぞれの価値観の考え方」のカテゴリーが見出されたが，日本看護系大学協議会で示されている看護学士課程におけるコアコンピテンシーに基づく卒業時到達目標の一つである「エンド・オブ・ライフにある人と家族を援助する能力」と，厚生労働省においては，看護師には「その人らしい」とも言い換えることができる生き方を支援する役割が期待されている[2)]，という部分と一致するところがあり，学びとしての到達点に関しては効果があった考える。また，これらの学びも共起ネットワークの「グループワークでの学び」からみても分かるように，これから専門実習に望むにあたっては，他のグループでの学びも自分のものにして実習に活かすという部分では，他のグループ発表を他者評価することにより，視野の広がった学びが主体的に出来たのではないかと考える。

Ⅵ　お　わ　り　に

臨地実習で終末期の看護を経験する学生は多くない状況である。そのため，教育的工夫が必要とされ，講義では研究報告を参考に映像やプロジェクト学習を取り入れ，ポートフォリオ評価を基盤としたルーブリック評価や講義にインパクトシートを使用したルーブリック評価を取り入れ講義の工夫をした。この講義の工夫により学生が積極的に講義に参加し，主体的に学習に取り組み学生自らが課題を見つけ，解決するという要素が示唆された。

＜引用参考文献＞

1）厚生労働省（2018）人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン，2020 年 7 月 29 日閲覧，
https:www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10802000-Iseikyoku-Shidouka/0000197701.pdf.

2）田村恵子（2019）終末期看護：エンド・オブ・ライフ・ケア　第１版，（経過別成人看護学）メヂカルフレンド社，p 18.

3）一般社団法人　日本看護系大学協議会（2018）看護学士過程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標，2020 年 7 月 10 日閲覧，
https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf.

4）厚生労働省（2019）看護基礎教育検討会報告書，2020 年 7 月 12 日閲覧，
https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf.

5）森慶輔（2019）VTR視聴による出生診断および終末期ケアに関する看護系大学生の意識の変化，足利大学看護学研究紀要７（1），83-94.

6）中尾友美，石井あゆみ，隍智子（2019）探求学習を活用した終末期ケア教育に関する看護学生の学び，千里金蘭大学紀要 16，091-099.

7）横井弓枝，玉木明子，犬丸杏里，藤井誠，辻川真弓（2020）看護大学生を対象とした終末期ケアシミュレーション教育のレジリエンスへの影響：無作為化比較試験による検討，Palliat Care Res 15（2），153-60.

8）犬丸杏里，玉木明子，横井弓枝，富田真由，藤井誠，辻川真弓（2018）看護大学生を対象とした終末期ケアシミュレーションの評価－振り返り用紙による質的研究，Palliat Care Res 13（2），181-86.

9）森京子，古川智恵（2017）講義とシャドウウイングを併用したがん終末期看護学実習における学び－急性期病院と在宅緩和ケア施設での実習を通して－　日本医学看護学教育学会誌，26-1，27-35.

10）小濱優子，滝島紀子，竹内和子（2014）川崎市立看護短期大学紀要 19（1），47-56.

11）鈴木敏江（2011）ポートフォリオとプロジェクト学習第一版 3 刷　医学書院，P 137-139.
12）厚生労働省（2010）：専任教員養成講習会及び教務主任養成講習会ガイドライン，2010 年 7 月 10 日閲覧，https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000021c5z-att/2r98520000021d00.pdf